

## ブルンガン王国のアラブ人移民 ——伝承と古文書にみるボルネオ北東岸のイスラーム小史——

奥島 美夏\*

### 1. はじめに

ボルネオないしカリマンタンと呼ばれるこの島はマレーシア、インドネシア、ブルネイの3国に分かれ、北東岸とはマレーシア領サバ州の東海岸側から、インドネシア領東カリマンタン州のカニウガン岬(ブラウ県)までをさす。筆者は東カリマンタンで1996年から2年半にわたって人類学調査を行い、その後もインフォーマントの親族をたずねたり、古文書や碑文などの文字資料を集めるために北東岸地域を訪れている。本稿では、これまでの調査でえたアラブ人移民にまつわる断片的なデータを整理し、ブルンガン王国を中心にこの地域のイスラーム受容との関わりについて簡単に紹介してみたい。

### 2. ブルンガン王族の改宗—ハドラマウトのイマム伝説

ボルネオ北東岸は、古来より交易大国として栄えたブルネイ王国のいわば後背地であった。17世紀、スペイン統治下のスールーやミンダナオ諸島はボルネオ北東岸からやってくる獐猛なブルネイ王軍に悩まされていた。これはスペイン人に *Camucones*<sup>1</sup>、スールー(タオスグ)方言で

は *Tirun* と呼ばれたティドン(ムルト系言語族)のことである。17世紀末頃にボルネオ北東岸がブルネイから割譲されると、スールーのスルタンはスペインの助力を得てティドン征服に全力をあげた。18世紀後半にこの地域はスールーの勢力下に入り、スールーやスラウェシからのマレー商人が主要河川の林産物交易を直接指揮するようになる<sup>2</sup>。

新興王国ブルンガンが西欧の史料に登場するのはまさにこの時期である。当初、王の名は不明でスルタンの称号もなく、かつてはパシールやスールーの傘下にあったと描写される<sup>3</sup>。現地の王族に伝わる系図をみると、実際この時期にそれらのスルタネイトとの通婚が行われている(図1)。ブルンガンは当地域のより古い諸王国と同様に、ティドンと内陸諸民族が混交してできたものであり、その王族はカヤン河口に入植したタラカン島のティドンを母体としていた。だがティドンとブルネイやスールーとの通婚が17世紀には始まっていたにもかかわらず(Nicholl 1991)、彼ら

---

\* 神田外語大学

<sup>2</sup> 紙面の都合上、ティドンやボルネオ北東岸の歴史については Okushima 2002 と、その引用文献 Majul 1973、Tarling 1978、Warren 1985、1991、Loyré 1997 などを参照のこと。

<sup>3</sup> Okushima 2002 の Radermacher 1780、Darlymple 1793、Leyden 1812、Hunt 1814 を参照。

---

<sup>1</sup> ただしこの語には、ティドンの古くからの同盟者バジャウ(サマ/サマル)も含まれている(Tarling 1978; Nicholl 1991)。

の多くは長い間首狩りを敢行するアニミストでありつづけた。史料をみる限り、ティドンがある程度までまってイスラーム化したのは 18 世紀末から 19 世紀前半にかけてのようだ<sup>4</sup>。

ブルンガンがオランダによってスルタネイトとして承認され正式に通商条約を結んだのは、初代のスルタンから 3 世代目のことであった。王族の改宗は地元では非常に有名な伝説で、ヴァージョンによって細部が多少異なるものの、おおよそは次のとおりである。

ブルンガンに入植したタラカン・ティドンは、沿岸に村を作っていたアラブ系スールー貴族と通婚同盟を結び、以来タラカン王は代々身内から当地を警護する海軍大臣(*wira*)を派遣していた(図 1)。その子孫 Wira Amir の時代、スールーとバジャウの連合軍に激しい攻撃をしかけられ、一族はじりじりとカヤン河口の支流ソロッ(スールー)まで追いつめられる。もはやこれまでという時に、ジャワのドウマツから来たあるイマム(*imam*、宗教指導者)が、改宗を条件に彼らに秘策を授けた。教えに従って Wira たちが夜中に大量の灯籠を河口に流すと、沖合で数珠つなぎになって停泊していたバジャウの船に次々と火が燃え移り、ようやく敵を敗走させることができたのである。戦いが終わると、ブルンガン王族は早速イスラームに入信し、彼らのいたソロッもイスラーム式の挨拶(*assalamualaikum*)にちなみサリム・バトゥと改名された。その後 Wira の息子はスルタン

<sup>4</sup> ティドンのイスラーム化については Okushima 2002 の Forrest 1792、Hageman 1855、Dewall 1855 などを参照。

として即位し(Sultan Alimudin)、あわせて父親もスルタン名(Sultan Amiril Mukminin)をおくられた。ちなみに、この Alimudin の息子 Sultan Kaharudin が、1848 年のオランダ視察によって初めて世に知られることになる。

改宗とひきかえの勝利や奇跡はイスラーム世界で始終使われるモチーフだが、ここで重要なのはイマムの名が Said Abdurrahman bin Abdullah Bilfagih といい、ハドラマウトの出身といわれる点だ。Bilfagih/Belfagih はハドラマウトの Bal Faqih という氏族名にあたり、特権階層に属する<sup>5</sup>。現イエメン共和国にあるハドラマウト地方は 18 世紀以降大量の移民を東南アジアに送り出しており、彼らはまずスマトラのアチェに、そしてさらに西カリマンタンやジャワへ進出した。実際、西カリマンタンのポンティアナツやクブは、ハドラマウトの名家の血をひくスルタネイトとして 18 世紀に成立している。ブルンガンのある古文書も、上記の改宗をヒジュラ暦 1121 年(西暦 1709-10 年)とする。これは他の古文書や墓碑<sup>6</sup> および西欧の史料と照合すると、もう少し遅い 18 世紀半ば以降の出来事のように思われる。だが、いずれにせよ、件のイマムは初期のハドラミー移民であった可能性が高い。

ただし、厳密にはブルンガンのイスラーム化は

<sup>5</sup> 以下の各氏族名や尊称については、Omar Farouk 氏と新井和広氏のご教示によるところが大きい(謝辞参照)。西カリマンタンなど東南アジアのハドラミーに関しては Dewall 1862、Enthoven 1903、Omar 1996、新井 2000 を参照。

<sup>6</sup> 古文書類はブルンガン王族の末裔たちの個人蔵、イマムの子孫 Albi Bilfagih ら 3 人の墓碑はサリム・バトゥに現存する。

この時点から始まったわけでも、ハドラーミーによって初めてもたらされたわけでもない。前述のようにティドンはそれ以前から周辺スルタネイトと関係をもっていたし、図1を見ても Wira Amir の何世代も前から様々な地域のムスリムが婚入しているからである。これらのムスリムとその子孫は生前イスラーム名ももっていたと考えられるが、ほとんどがマレー系の称号や名前しか記録されておらず、アラブ氏族名に至っては2人しかいない。

概してボルネオ北東岸における集団改宗は、通婚や布教から以外に、首狩りや戦争を回避するため、または降伏条件として相手から要求されたためにも起きた(例えば Dewall 1849; Spaan 1902)。だがブルンガンでは、先の改宗事件をきっかけに周辺地域に対する攻撃は鎮まるどころか激しさを増す。スールーがボルネオ北東岸の林産物交易から撤退する原因となった首狩りの多くは、ブルンガンのスルタン率いる非ムスリム内陸民によるものである(Okushima 2002)。とくに Wira Amir と孫の Sultan Kaharudin は、それらの内陸民の口頭伝承にも登場し、彼らの先祖とともに人生の大半を戦場で過ごしたといわれる。19世紀半ばには、ブルンガン周辺の主要河川は度重なる戦争で無人化し、スールーの勢力圏はアタス(サバ州スンボルナーラハツ・ダトゥ間)まで後退する<sup>7</sup>。さらにブルンガン軍は、一時スールー諸島南部のタウィタウィ島にまで侵攻するほどの勢いであった。

<sup>7</sup> 以上は Okushima 2002 の Dewall 1855、Hageman 1855、Gallois 1856、Aernout 1885、Warren 1985などを参照。

ではなぜ上記の改宗はブルンガンでとりわけ大きな事件として記憶されているのだろうか。それは、彼らが「ブルンガン」という新たなマレー民族として名乗りをあげ、母体であったタラカンの王族と決別すべく強調したためであったと思われる。さらに、その立会人がスールーやブルネイなどの旧宗主国からではなく、より正当なイスラームの中心地から来たイマムであったということで、この新興王国は自らの格づけをはかったのだろう。タラカンの伝承では、Wira Amir は内陸民との長い通婚・同盟関係の結果、自らをティドンでなくブルンガン族と宣言し、内陸民カヤンの貴族の系譜を主張するようになったという(Amir Hamzah 1998)。このような経緯に基づき、言語的には今も圧倒的にティドンに近いにもかかわらず、オランダ時代の記録や今日のブルンガン政府の刊行物の多くは王族の祖先をカヤンとする。

こうしてブルンガン・マレーとなった人々は、イスラーム諸国との通婚同盟を足がかりに台頭しながらも、ティドンとしての記憶を王族の系図や起源神話から削除し、反対に内陸民としてのアイデンティティを強調することによって、周辺スルタネイトから「先祖伝来の」領土を奪還することに成功したといえる。

### 3. さまざまなアラブ氏族

アラブ人に話を戻すと、ハドラーミーだけがブルンガンのアラブ人移民だったわけではなかった。例えば図1では、Wira Amir の三代上に別系統のアラブ人、すなわち先述のアラブ系スールー貴族 al-Magribi 族が婚入している。この氏族は

ブルンガン最古のアラブ氏族のひとつであり、後からやってきた同胞と違って主に布教目的で渡来し、ごくわずかしか定着しなかったという。起源は文字通りマグレブ地方のどこか(リビア?)であろうが、ブルンガンに辿りつく以前に他国で世代を重ねている可能性もあり、詳細は不明である。また、イラク出身の *al-Musyarafah* を名乗る人物は、*Wira* の姉妹と結婚して政治の要職に迎えられた<sup>8</sup>。このように、各氏族はそれぞれ渡来目的や生業が異なっていたという。

概してブルンガンには 7 つのアラブ氏族がいたといわれる。ただしこれは、インフォーマントによって若干の名が異なり、私自身の採集した氏族名が 7 つ以上あったことからみて、地方の代表的氏族くらいのニュアンスだろう。地元でよく知られる *al-Idrus*、*al-Jufri*、*al-Sa'gap (Saggaf)*、*Bahalwan* は、ハドラマウト系氏族 *al-'Aydarus*、*al-Jifri*、*al-Saqqaf*、*Ba Halwan* に相当し、主に商業振興者としての役割を担っていたという。例えば 19 世紀半ば、ブルンガンのスルタンは地方の二大有力商人、*Orang Kaya* (ブギス) と *Habib Abdullah* (アラブ) を交易エージェントとして召しかかえていたが(Okushima 2002)、後者の一族は西カリマンタンのクブ王も輩出した *al-Idrus* 家である。また *al-Saggaf* はシンガポールやフィリピンにも多い。これらの氏族は伝承によるとグジャラートの出身とも言われるが、事実グ

ジャラートには 16 世紀ごろから多数のハドラマミーが移住している。その他、起源がよくわからない *al-Marjak* (発音によって *Margah* / *Martuh* と)なども含めて、これらのアラブ氏族はブルンガン王都の対岸につくったアラブ村に住み、主に王族や地方の有力者と通婚した。彼らはブルネイやスールーのような周辺スルタネイトとも広く親族関係があり、そのため優先的に官職や交易上の便宜を図ってもらえたという。

一例として、あるアラブ人移民の半生をみてみよう。*Syed Umar Ali* (サバでは *Omar* と)は 1886 年にブルンガンの宮廷官吏 *al-Marjak* 家に生まれた。現存する資料に彼のジャウィ文や印章 (*mohor*) が残っていることから、各種の公文書発給業務に携わっていたと思われる。彼の系譜(図 2)は 3 代しか遡れず、妻たちの名も明記されていないことから、タラカン王との姻戚関係はあったにせよ、さほど権勢をふるったわけではなさそうだ。そのためか *Umar* は宮廷内の派閥争いに敗れ、1914 年 8 月に当時のスルタン *Kasim al-Din* (在位 1901~24 年) の名でタラカン島パニンキ村の村長としての辞令をうけた。明らかな左遷である。

失意のうちに *Umar* は、旅に出て見聞を広めようと単身でフィリピンへ渡る。スールーでイスラーム教の教師となった彼はすぐ現地のスルトンの目にとまり、スールー諸島南部を治める臣下 *Paduka Maunala Datu Idris II*、通称 *Raja Muda* の姉妹と結婚、1926 年にこの貴族が病で倒れた際には代理役に指名された。その後マッカ巡礼を終えた *Umar* は、シムヌル島のバジャウ

<sup>8</sup> マッカ(メッカ)のカアバ神殿の美称でもあるこの名が本当に氏族名かどうかは不明。なお、その息子 *Zainal Abidin* は、マッカの美称 *al-Mukaramah* を付して呼ばれることが多い(図 1)。

貴族だった 4 番目の妻(図 2)の係累を頼って、1931 年にサバ州サンダカンへ移住する。これは彼のフィリピン滞在許可が 1921～30 年の間だったためでもあるようだ。以後 66 年に亡くなるまでサンダカンにとどまる。

彼の故郷ブルンガンがインドネシアとして独立すると、1963 年にマレーシア領となったサバとの間にいわゆるコンフロンタシ(対決)がもちあがる。ジャワの義勇軍は 64 年 6 月、ブルンガンを含むマレーシア国境地帯に上陸、事前にマレーシアから知らせを受けて亡命したスルタンの係累十数名をのぞき、周辺一帯の王族・貴族はタラカン島沖に投げ込まれ、王宮は焼き払われた。この大虐殺の理由については、インドネシア中央政府が地元の油田から生じた莫大な収入を狙ったためだとか、王族の一部が共産主義者と通じていたためなど様々な言説があるが、真偽のほどはわからない。知らせを聞いた Umar は子孫に災いが及ぶのを恐れ、ブルンガン時代の書簡や公文書、印章などの大部分を破棄したという。

以上から、王宮官吏とはいえさほど地位の高くなかった al-Marjak の一員が、政界から失脚したのち外国を渡り歩きながら激動の時代を生き抜いた背景には、やはりアラブ人のもつ特権がある程度かかわっていたといえよう。書記官や宗教教師という職業はどこでも高く評価されたし、アラブ人は男女ともに王や首長の結婚相手としても喜ばれたからだ。行く先々の通行許可や資金についても、アラブ人移民のネットワークがある限り心配いらなかったと思われる。

#### 4. 尊称・イマム・巡礼者

最後に、系譜や伝承の研究でしばしば問題となる尊称・敬称の類について触れておこう。

原則上は預言者ムハンマドの孫ハサンとフサインの系統によって使い分ける sharif と sayyid、そして sayyid 出のウラマーに用いる habib などの尊称は、東南アジアではほぼ同義語として使用されることが多い。ブルンガンの日常会話では主に habib を使い、sayyid(現地のスペルでは said、syed など)と自動的に入れかえられる。一方、sharif(syarif、sarip)はほとんど使われない。これは現地のアラブ人の多くがハドラマミーだったためだろうか。図 2 の Umar の先祖も、当初はみな syarif を冠しているのに、時代が下るにつれて syed を使う子孫が増えている。おそらくこの一族は、スルーのような syarif を使用する地域から来島し、ブルンガンに定住した後は地元の慣習に従って syed に切りかえたのだろう。

なお、サイド出身の女性には sharif の女性形 sharifah(syarifa、saripa)を用いるが、こちらはブルンガンのアラブ人はもちろん、アラブの血統とあまり関係なさそうなムスリムにまで広く見られ、時に尊称というより女子の個人名のように単独でも使われる。

一方、宗教指導者は出自によらずイマムと呼ばれる。ブルンガン王国史の初期には、先の Bilfaggiyah やパシール王の娘婿(図 1)のように、ドゥマツからのイマムが多く登場するが、より後代にはブルネイ、バンジャルマシム、スラウェシなどの近隣諸国からも来ていたようだ。例えば、ブルンガン王都のモスクに残る有名なコーラン写本の

筆者 Haji Ambo Tuwo (Syahabuddin)は、20世紀初頭にスラウェシ島のワジョから招かれたイマムである。

ただし、すべてのイマムが上記の人々のようにある程度研鑽を積んだ宗教家だったわけではなく、またアラブ人の子孫とも限らなかった。19世紀末からイギリス植民地政府下にあったサバでは、石炭採掘やプランテーションの労働力として集団移住の積極的受け入れを行ってきた。ブルンガンその他の諸地域からサバ東海岸へやって来たティドン、スールー、ブギスなども移住村をつくるのが認められていたが、かならずイマム、助産婦(*bidan*)、治療師(*tukang obat / dukun*)を一人ずつ揃えるという条件つきであったという。だが、いわゆるイマムがこの地域に数多くいるわけもないので、多くのムスリム移住村では村長や顔役が兼任しなければならなかった。例えば、サバと東カリマンタンの国境に近いクラバカンには、20世紀初頭に Imam Salleh という首長がいた。彼の名は Pengeran Salleh といい、ブルンガン・スルタンの係累であったが、彼の兄とともに必要に応じてイマム役を務めたため、前者の呼び名で知られるようになったという。

そのほか、マッカ巡礼を終えた者はハジ(*haji*)と呼ばれる名誉に浴する。蒸気船が発明される19世紀半ばまで巡礼は命がけであったとはいえ、ブルンガン王族は18世紀以前からマッカに出かけていたようだ。図1の Wira Amir の曾祖父 Abdurrasid は、伝承によると晩年巡礼に出かけ、帰路の途中バンジャルマシで亡くなっている。当時の一般的な巡礼は、王族や裕福な商人が

自前の帆船を出し、その係累や臣下もそうした機会に便乗するというものであった。一向はまず、ブルネイやシンガポールのようにマッカ巡礼を請け負うエージェントのいる港まで2、3ヶ月かけて辿りつき、そこから大型船に乗り換えてインド洋をめざした。巡礼を終えて帰国するまでには数年を要したという。時代が下ってオランダ船などの定期便が出るようになると、個々に旅費を払って出かけるケースも増えてくる。

だがブルンガン王族の系図をみる限り、ハジの敬称を伴った名前が現れるのは、Abdurrasid の時代よりはるかに後の19世紀になってからである。これは彼らがハジよりも *pengeran, raja* といった身分を示す称号を好んだことによるようだ。しかし、オランダやイギリスによる直接統治が始まると、ボルネオ北東岸諸国は、内政に干渉するようになった西欧への反発から、急速にイスラームに傾倒してゆく。19世紀後半からハジを冠した貴族名がブルンガンの系図に増えるのは、こうした事情を反映したものと思われる。20世紀にはいると、サバでもイスラーム主義を掲げた協会の結成や反乱が次々と起こることになる。

## 5. まとめと今後の研究にむけて

本稿でとりあげたブルンガン地方を含むボルネオ北東岸は、概して文字資料の少ない東南アジア島嶼部の中でも、とくに史的経緯の研究が遅れている地域のひとつである。スルタンのみを通商条約を結ぶべき地方宗主とみなす西欧諸国にとって、イスラーム化の遅れていたこの地域は対象外であり、スルタンの非力さゆえに首狩り

や海賊行為が横行する「お荷物 *lastposten*」(Black 1985)とみなされてきた。しかし現地の伝承や古文書などを調べると、ムスリムと数世紀にわたる関係をもちながら、むしろ非ムスリムとのきずなを通じて覇業を進めてきたブルンガン王国と、その中になんか早い段階からとりこまれていたアラブ人移民の多様な背景が浮かびあがる。また、これらのアラブ人の大半は何らかの形でイスラームの普及に関わっていたにもかかわらず、ボルネオ北東岸のイスラーム化は植民地時代の反西洋主義のあらわれとして急激に促進されたようだ。

以上はあくまで当地域のスルタンや地方首長の子孫を中心に行った調査からの概要である。より詳細な報告は、上記のアラブ人移民やイマムの子孫へのインタビューや文字資料の解読を待つてあらためることにしたい。

#### 〈謝辞〉

アラブ人移民の背景に関して多くのご教示をいただいた Omar Farouk 氏(広島市立大)、新井和広氏(ミンガン大学)、論文への有意義な示唆をいただいた西尾寛治氏(東京女子大学)に深謝いたします。

#### 〈参照文献〉

- Amir Hamzah bin Badarudin 1998 *Sekilas mengenal Tanah Tidung*. Samarinda (manuscript).
- 新井和広 2000「ハドラーミー・ネットワーク」尾本恵市ほか(編)『海のアジア 2 モンスーン文化圏』岩波書店
- Black, I. 1985 “The ‘Lastposten’: Eastern Kalimantan and the Dutch in the

nineteenth and early twentieth centuries.” *Journal of the Southeast Asian Studies* 16-2.

Dewall, H. van 1849 *Derde Reis van de Civile Gezaghebber voor Koetei*. Jakarta; Arsip Nasional (manuscript).

----- 1862 “Matan, Simpang, Soekadana, de Karimata-eilanden en Koeboe (Wester-afdeeling van Borneo).” *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde*. 6-2.

Enthoven, J. J. K. 1903 *Bijdragen tot de Geographie van Borneo’s Wester-afdeeling*. Leiden; E. J. Brill.

Nicholl, R. 1991 *Raja Bogso of Sulu: A Brunei Hero in his Time*. The Malaysian Branch of Royal Asiatic Society.

Okushima Mika 2002 “Commentary on the Sebuku Document: Local history from the perspective of a minor polity of Northeast Borneo.” *Sophia Asian Studies (Jochi Ajiagaku)* 20.

Omar Farouk Bajunid 1996 “The Arabs in Southeast Asia: A preliminary overview.” *Hiroshima Journal of International Studies* 2.

Spaan, A. H. 1902 “Reis van Berouw naar Beolongan.” *TNAG* 19.

Tarling, N. 1978 *Sulu and Sabah: A Study of British Policy towards the Philippines and North Borneo from the late eighteenth century*. KL: Oxford University Press.

図1：タラカン-ブルンガン王族の系譜 (\*枠内は婚入したムスリム、網掛け部分はブルンガンの歴代スルタンを示す)

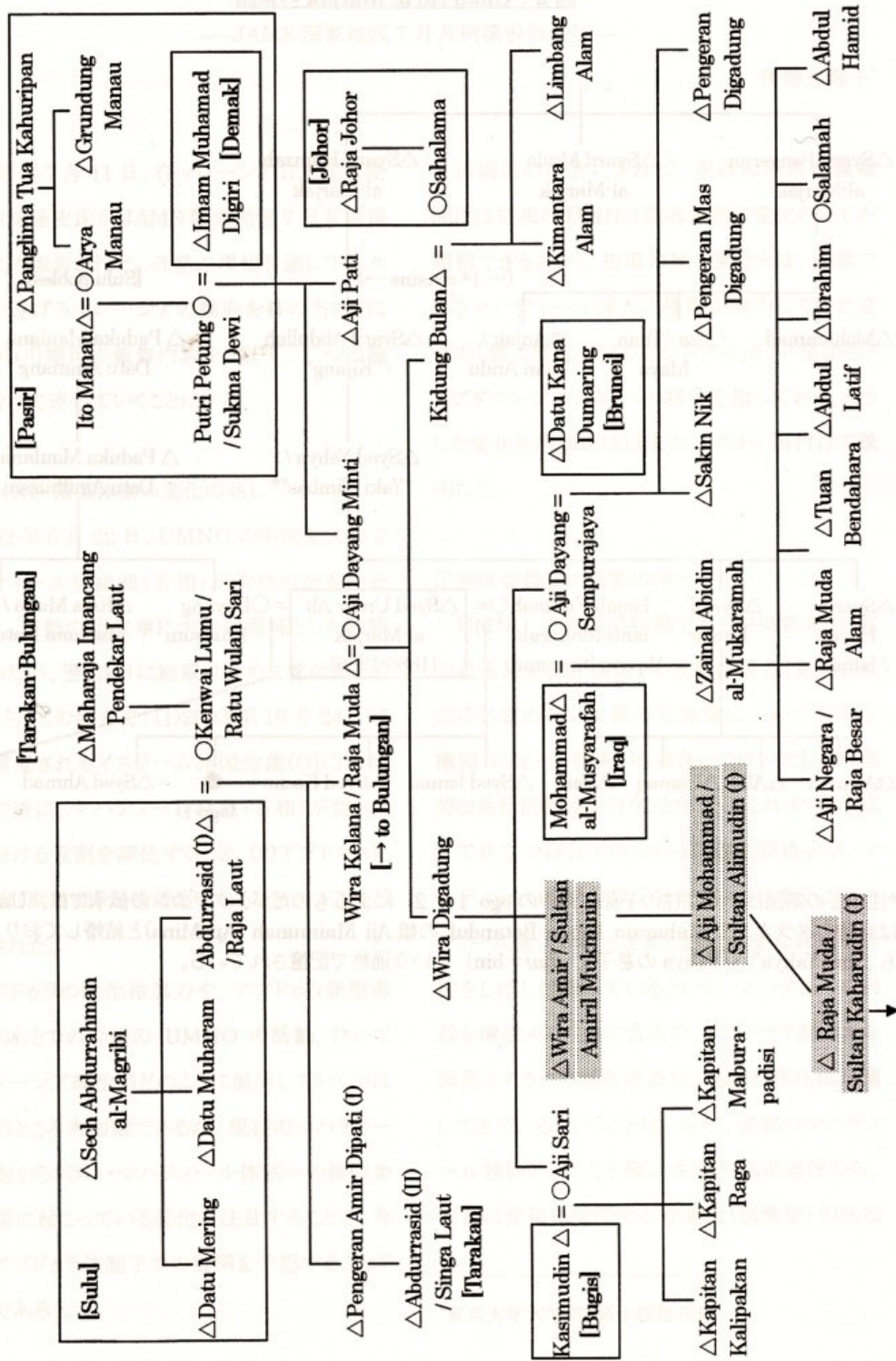
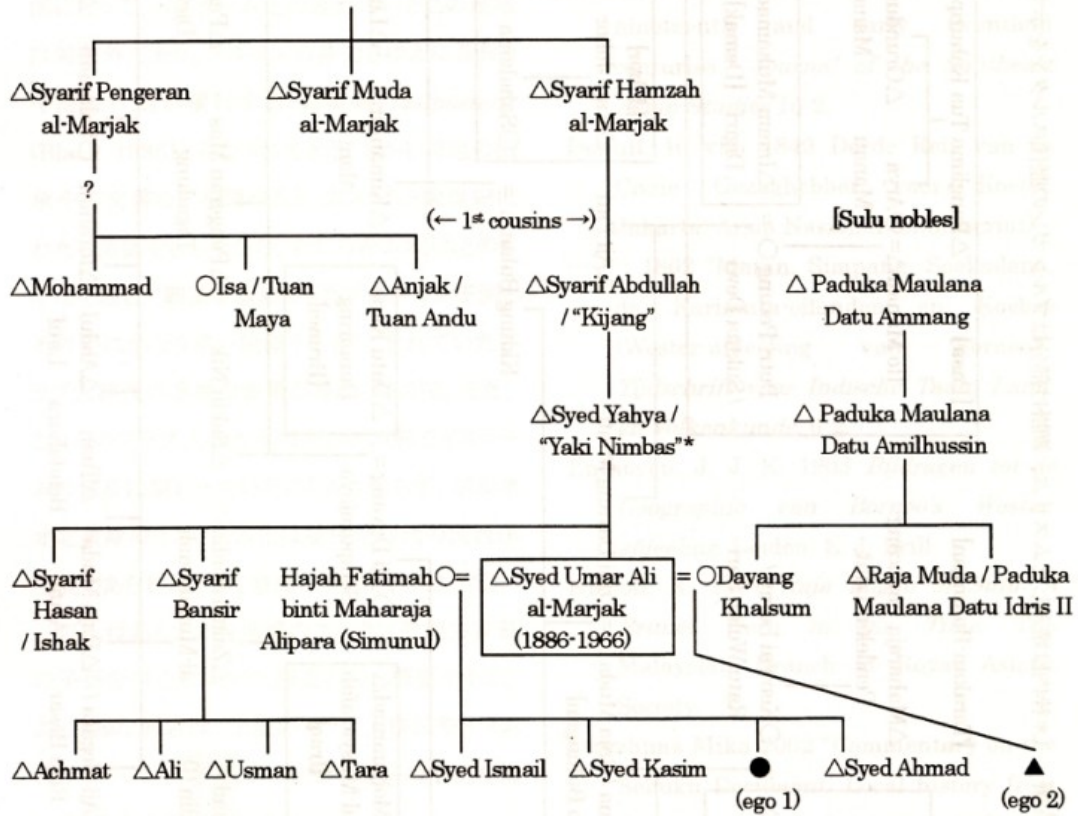




図 2 : Umar Ali al-Marjak の系譜



\*注：この系図はサバ在住の子孫（図中の ego 1 と 2）によるものだが、タラカンの伝承では、Umar の父は当時のタラカン王 Maharaja Dinda Betanduk の娘 Aji Maimunah (Aji Mina) と結婚しており、Umar も “ibni Yahya” (「Yahya の息子」、*ibni*= bin) という通称で記憶されている。